

大沢池景観修復プロジェクト — 古代と現代を結ぶ文化遺産 —

京都嵯峨芸術大学観光デザイン学科 観光デザインセンター 真板 昭夫

Osawanoike Landscape Restoration Project-Cultural heritage as a bridge between ancient times and modern times-. Akio Maita (Kyoto Saga University of Art)

概要

京都の西部、嵯峨野に位置する名刹大覚寺には、周囲約1kmの日本に現存する最古の林泉の庭園である大沢池がある。もとは奈良時代に秦氏一族によって造成されたため池であり、平安時代に嵯峨天皇が離宮嵯峨院の造営にあたって、中国の洞庭湖を模して造られたものである。1989年大沢池に繁茂する水草除去のため、外来種であるソウギョを多数放流したところ、数年を待たずに、水中の植物はほとんど摂食され、水草のない風景の池となった。さらにソウギョは、池の杭や水際に生育していた樹木の根を食害し、池の漏水や、樹木や草本類の生育不良、水質悪化を引き起こし、庭園としての風景が失われていた。こうした状況から、寺関係者や周辺住民から水草が生育していたところの大沢池に復元したいという希望が高まっていた。このプロジェクトは、ソウギョを放流する以前の大沢池の風景を復元することを目的として設置されたものである。プロジェクトでは、大沢池の社会環境調査とともに、風景を復元するために必要なソウギョの生息状況調査等、種々の自然環境調査も実施。調査の結果をもとに、適切なソウギョの生息個体数コントロール、土壌改良、水質改善、

風景復元のための水草植栽などについて検討し作業を行った。こうした結果、現在ではハスやスイレン・ヒシなどの水草が再び生育し、水鳥の飛来する風景が復元されている。このプロジェクトは、現場の状況をみながら順応的に調査・対策・検証を行ったこと、対策の検討では、外来種の投入によって貧化した環境を、地域の生物多様性の復元を行うことによって風景を復元させたことが特徴である。

大沢池景観修復のための課題

自然系文化遺産としての大沢池

文化遺産とは、人が造り利用し関わりをもってきた事物の歴史的所産であり、大覚寺大沢池もその一つである。大沢池は、造営されたため池の上に、平安時代、嵯峨天皇と空海が「未来への平和と安全への祈願」を込めて中国の洞庭湖を模して作庭したものである。そのため、唐の文化を模して舟遊びを催したとされ、毎年仲秋の名月には船を浮かべて月を愛でる「観月会」に引き継がれている。大沢池は1200年以上からの生産機能と唐の文化象徴する文化的な機能という二面性を有している自然系文化遺産というべきものである。

自然系文化遺産の持続的保全と継承

今後、持続性という観点から、どのように保全し継承していくのか？

動態保存をしながら過去から現代までをつないできた大沢池という自然系文化遺産を、こんどは持続性という目的に沿って、未来に向かって、どのように継承していくのかという文化遺産の「時間をつないでいく」というテーマに関わる課題がある。こうした課題解明には「一つの行動や行為には必ずその行動へと動かしていく社会的背景や要因が存在する」こと、また、「水草除去のために草魚を池に投入した社会的背景」を分析し、その解明を基に、課題を克服する新たな持続的な対策を考えていくことが求められる。

進め方 研究調査～方針策定～復元作業～ 結果のプロセス

以上をふまえて行われた「大沢池現状の把握の調査内容から結果」までのプロセスをフローチャートに示す（図1）。

ソウギョ生息調査

ソウギョについては、適切な生息密度、ソウギョの生息する範囲や食性や行動など、具体的な指針

に必要な情報は不足していた。そのため、テレメトリを用いてソウギョの行動や生息範囲、食性について調査するとともに、適正な個体数の推定とその結果に基づく最適個体数の維持管理を行った。

推定されたソウギョの行動範囲

テレメータを装着した各ソウギョは、群れにはならず、個別の行動圏を持っていた。また、池内を遊泳することはなく、池の水深が比較的深い箇所にとどまる傾向がみられた。

ソウギョの個体数コントロール

ソウギョは水深3.5mの大沢池最深部に避難するので、最深部周辺を取り囲むように漁網を設置し、水抜きにあわせて捕獲を実施した。

捕獲したすべての魚類は体重、全長、尾又長を計測し記録した。

この作業によって合計35尾のソウギョを捕獲・除去した。

大沢池現状把握調査

ここではフローに示したように、測量調査および大沢池の構造把握・樹木活力度調査・生息生物種調査・水利用状況調査を行った。

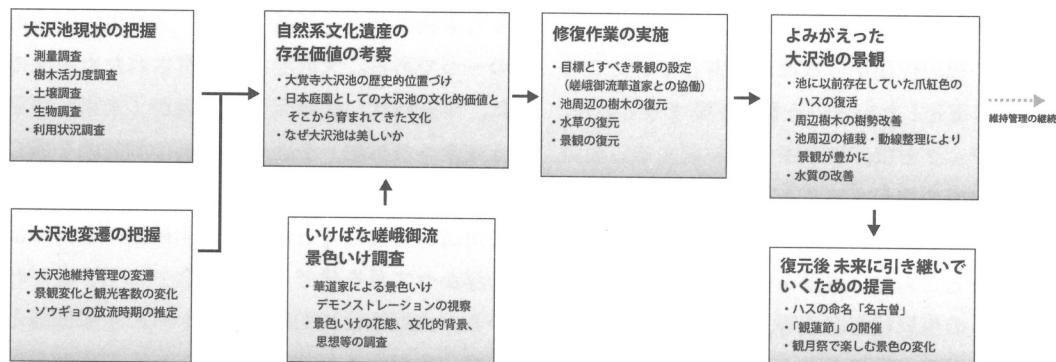


図1. 大沢池景観修復のための作業フロー。

大沢池変遷の把握

ため池としての大沢池の利用が水生動植物にどのように影響していたのかを検討するために大沢池の水利用に関わる管理実態の把握を行った。

大沢池の水は、水面利用と水利用とに用途が分かれている。

水面利用の主体は大覚寺であり、4月の「嵯峨天皇奉献華道祭」と10月の「観月会」の際に“龍頭鰯首（りゅうとうげしゅ）の船を浮かべる”ための水深の確保が主目的となる。一方水利用の主体は周辺の農家であり、春から秋にかけての放流による水利用が主目的となる。大沢池の水量と流れの管理は、この二つの用途に基づいて行われておりその年間利用の体系を把握した。この水利用による水位や水量の変動が水性動植物の生息状況のコントロール要因になっている事が推測された。

いけばな嵯峨御流 七景三勝

景観修復には史跡名勝に指定されている事もあり、景観の修復にあたって、目標となる景観対象の根拠の提示が必要であるが、本調査で嵯峨天皇と空海の思想を基に生み出されたと伝えられる大沢池発祥の華道 嵯峨御流の自然景観をいける「景色いけ」の技法のなかに、大沢池を表徴する「庭湖の景」が伝承されていることを探し出た。いけばな芸術とも言える嵯峨御流の「景色いけ」は自然環境を表現する生態学や景観など科学・技術としての視点が備わっているものであった。景色いけを分析し、その自然観と考え方をもとに大沢池の景観修復に応用した。ここでは十分に紹介できないが、「景色いけ七景三勝」では、日本景観は水の流れに沿って創造されて行くものであるとし、山から海までの水の流れを軸に、深山から

海浜までの景色を7つの連続した景観の変化として表わしており、どの景観一つが枯れても日本の自然は無くなるとしている。三勝では、深山の景の代表として高雄の景を、河川の景の代表として嵐峡（嵐山の保津川）の景を、池水の景の代表として庭湖の景（大沢池）を表している。

華道家と協働して策定した景観修復計画

嵯峨御流の自然観・思想、我々の造園学、植物生態学、動物生態学、社会学の視点を併せ、これまでに調査したデータ結果を基に、ポイントとなる位置から眺めた時の景観、植物の衰退に伴う、景観の変化を華道家と共に視察。嵯峨御流の「景色いけ」で伝わっている自然観と考え方を基にどのような種類をどこに植栽すべきか具体的な検討を行った。

大沢池の周辺植栽基本計画及び水草植栽基本復元計画平面図

植栽種の選定、配置計画にあたっては、大沢池周辺の自然環境や文化にも配慮して行った。大沢池の周辺部では、嵯峨野の過去の景観調査のデータや現存植生、「景色いけ」で用いられる種類から、シラカシ、シイノキ、モミジ、ヤマザクラ類などの他、「三種」と呼ばれるマツ、ダイダイ、キンモクセイなどの嵯峨野の人々が昔から自分たちの庭園に植え、現代まで引き継いでいる文化としての種類も選定した。大沢池内の水性植物も、過去の景観調査、周辺水域の植生や、「景色いけ」で用いられる種類の中から、大沢池の水深、低草、水質などの状況に寄ってヨシ、スイレン、ハス、ショウブなどの種類を選定した。

修復作業の実施

基本復元計画平面図をもとに、ヨシの植栽、ク



図2. 爪紅色の花を咲かせた大沢池のハス「名古屋」.

スノキ周辺の土壌改良、ハスの植栽～ハスの繁茂
自然石による縁石整備（散策客動線の調整）、な
なこ垣作成～設置（散策客動線の調整）、スイレン
舂設置、脇の小さな池にはヨシの植栽を実施した。

よみがえった大沢池の景観

2005年池の中にあったハスの種子が自然発芽し
成長した。爪紅色の花を開花させ、2009年には3
千本のハスの開花を見る事が出来た（図2）。同
時にヒシ、マツモなどの在来種の水草も自然に発
生し、繁殖を見せる様になった。

同年、ハスの復活を祝い、大覚寺がハスに史跡
名勝の対象の一つにちなんで「名古屋」（なこそ）
と命名。それをきっかけに奈良時代からの宮中の
行事であった「観蓮節」（かんれんせつ）という
行事を毎年行うようになった。現在はハスやヨシ
などの水草が復活して池の再度水面一面を覆うよ
うになったため、毎年数回、人の手で刈り取り作
業を行っている。

結論

このプロジェクトでは、

1. 現状を把握する調査を実施したこと
2. 対策を行う際に動態管理の考え方を取り入れ
たこと

3. 自生種による対応を原則とし、外来種をでき
るだけは排除する考え方としたこと

など、地域の生物多様性を保全する保全生物学の
考えを取り入れて実施された。

プロジェクトの結果、失われていたハス・スイ
レン・ヒシなどの水草の復元、水質の改善、樹勢
の回復、多様な生きものの復元・再生などが認め
られた。同時に、こうして再生された環境は、ま
た、観月祭の実施や観蓮節の復活など、文化・歴
史的な活動を活性化していった。

このことは、生物多様性の保全は、自然や生き
ものに貢献するだけではなく、歴史や文化につい
てもサービスを提供することができること示すも
のであり、今後、人間活動のさまざまな分野にお
いて評価・顕在化させ、広く取り組むことが必要
であることを示唆している。

なお、本報告は2010年5月18日から22日まで行
われた国際会議「都市における生物多様性とデザ
イン」（URBIO2010）においてテーマ「都市
の生物多様性と生態系ネットワーク」で、春田章
博、河原 司、真板昭夫の3名で発表したものを
要約したものである。